

第 24 回連続講演会

地域がキャンパス～2008 年度学生企画による環境学習活動発表会～

「あそび屋わにわにの取組」

半田 裕 (はんだ ひろし)

「あそび屋わにわに」代表・信州大学

1984 年生まれ。信州大学 3 年。2006 年 11 月～2007 年 4 月、アフリカ・マラウイ国・現地 NGO Development Aid People to People にて開発インストラクターとして HIV/AIDS の撲滅活動に従事。2006 年、子どもの権利条約フォーラム in 長野、パネラー。2008 年 6 月より「あそび屋わにわに」として、公園にてリヤカーを用いたプレイパーク活動を展開し、アースデイ長野、慶応義塾大学「ワークショップコレクション 2008」等に参加。



皆さんこんにちは。長野県から来ました、半田裕といいます。いま長野県で「あそび屋わにわに」という公園で子どもたちと遊ぶ活動をしています。僕も今信州大学の大学 3 年生で、皆さんと同じ学生で長野で学生なりに精一杯やっている活動をここでお話して、学芸大学の学生さんがやっている活動をお聞きして、お互い刺激をし合えるような会になればいいなと思っています。僕のやっている活動ですが、映像で見てもらうのが一番わかりやすいと思うので、地元のテレビ局で取材に来てもらったときのニュースの映像があるので、まずそちらのほうを最初にご覧ください。(活動紹介映像 7 分) 映像で見ていただいたのが、僕たちのやっている活動です。このような感じで公園で遊んでいます。今日は活動の内容というより、そこまでのプロセスや、どういう思いでやっているかという話をしたいと思います。

■「あそび屋わにわに」のはじまり

僕ともう 1 人ドンちゃん(土肥君)という 2 人で始めました。僕らが出会ったのは 2005 年でした。日本環境教育フォーラム主催の清里ミーティングというものが山梨県でありました。その時に僕と土肥君は出会って、でもお互い信州大学生だということも知らずに、たまたま同じグループで木と遊ぶ活動をして、意気投合して、2 人で盛り上がり、子どもたちと僕はこんな活動しているんだと意見を言い合ったりとか、一晩話をしました。次の日、そういえばどこの大学かという話をしたらたまたま 2 人とも信州大学でした。

僕は東京で子どもキャンプの団体で活動をしていて、土肥君も違う場所でそれぞれ活動していて、地元の長野で活動できたらいいなという思いを持ちながら違うところでやっていました。そのため、僕の中では彼との出会いは運命の出会いでした。長野へ行ったら絶対何か一緒に活動始めようよと約束をしました。このような出会いがあったのですが、いきなり別れることになりました。

僕が大学を休学して、その後アフリカとイギリスに留学しよう決めていたのです。アフリカの子どもたちと遊びたいなと思っていたのでアフリカに行くことを決めていて、僕が 1 年半ほど日本を離れてしまったのです。

土肥君も大学を休学して、彼は農業や林業に興味があるのですが、農家に弟子入りをして 1 年間修行を積ん

でいたみたいです。こういう感じで僕と土肥君は出会ってすぐに別れてしまいました。

1年半後、2007年の6月に僕は帰ってきたのですが、日本に置いてあった荷物がみんななくなってしまって、土肥君の連絡先をすっかりなくしてしまって、帰ってきたはいいのですが連絡が取れませんでした。どうしようかと思いつながら半年も経ってしまいました。そしたら突然土肥君から「そろそろ帰ってきたんじゃないの」という連絡が来ました。お互い待っていた相手との連絡が取れて、再会することになりました。この時は僕も彼も大学には復学して、長野に住んでいました。そして2人で会って、2人の思いを確認しました。

何をしたいかというときにやはり、自然の中で子どもたちと一緒に遊びたいというのが一番の思いでした。これは、子どもたちと遊びで何かを伝えるということよりも先行して、僕らが子どもたちと遊びたいという思い、これが一番強い思いとして僕らの中にありました。

こういう思いを確認して、何をしようかと考えた時に、僕ら学生2人しかいないわけですが、最初は自然学校ができたらいよいよね、とかプレイパークにしようとか、駄菓子屋をしたら子どもたち集まるのではないとか、いろいろ案が出ました。お金も場所もない状況でこれだけのものをやりたいと言っても、時間がかかったり、下手したら無理かも知れないという中で、それでは公園に遊びに行ってみようかと2人で話をし、公園に普通に行ってみました。そしたら、不審者扱いですね。その時子どもたちもあんまり公園にいませんでした。最初近づいていったら「ちょっとすみません」「何ですか」と子どもたちから敬語で断られました。保護者の方も結構も寄ってきて、上手くいきませんでした。そして反省会で、いきなり行っても厳しいということに気が付き、何か案を考えようということで、リヤカーを活用したプレイパーク活動をすることにしました。

何かこちらも団体として、それなりに見えるような形で行けば、子どもたちも遊んでくれるのではないかとように考えました。

そういうことを考えている時に長野でアースデイというイベントがあって、その中で子どもたちと遊ぶイベントをやりませんかという話が急に来ました。それで、その4月の大きいイベントに向けてリヤカーを見つけて、そこを僕たちのスタートにしようということでリヤカー探しを始めました。

■リヤカーでの活動

僕たちがリヤカーを選んだ理由はどこへでも行くことができるからです。公園や、行きたければ放課後の学校にリヤカーで飛び込んでいったりとか、どこへでも遊びに行くことができるのです。行くことで、行った先を自分たちの遊びのフィールドにできるというのがリヤカーを選んだ理由です。

あと、これも大事なのですが、形がおもしろい。リヤカーをきれいにデザインして、面白おかしい感じにすれば、それだけで子どもたちは食いついてきてくれるのではないかと思いました。最初に言ったように公園で不審者扱いされていましたが、このように面白い感じで行けば、子どもたちは一緒に遊んでくれると思いました。1月にリヤカーの活動をすると決めて、4月に向けて3ヶ月間リヤカー探しをしましたが、全然見つかりませんでした。お金も2人では足りなくて、買うといっても結構高くて、10万円を超えたりします。昔は結構リヤカーを使っている農家や家とか多くありましたが、今は必要がなくて減っていますし、まだ家にある人というのは使っている人です。必要だから残っているという状況です。

3ヶ月間人に当たってみましたが、ちっとも見つからなくて、アースデイ当日を迎えてしまいました。この時は仕方なく大学にお願いして、大学にあるリヤカーを借りて、そこにおもちゃを積んでいきました。そうして何とかアースデイは乗り切りました。

そのアースデイの打ち上げの時に、どういう団体が来ているのかという自己紹介をしました。そこで「僕ら2人で子どもたちと遊ぶ活動したくてリヤカーを探しています」という話をし、盛り上がっていたところ、「リヤカーを俺たちで見つけよう」というふうになってくれて、「味のあるリヤカーを探す会」という名前までつけて立ち上がってくれました。この人たちが、ホームページやブログに「リヤカーを探している若者がいます」ということを書いてくれて、それを見た人がまた自分のブログに書いてという繋がりです。この会がどんどん大き

なくなっていました。協力してくれた人たちの中にはいろいろな職種の人たちがいました。そのいろいろな人たちに協力して頂いた結果、リヤカーが見つかりました。

アースデイからわずか1週間で見つかりました。僕らが3ヶ月半かかって見つからなかったリヤカーはいろいろな人達の繋がりの中でたった一週間で見つかったのです。この写真がちょうど送られてきた写真で、「うちの庭に転がっているやつでよければ」と言われ、リヤカーを譲り受けました。

もらったリヤカーを2人で修理をして、僕が好きな色の赤で塗りました。子どもたちに食いついてもらえるようにして、公園に遊びに行きました。

最初公園に行ったとき子どもは5・6人しか遊んでいませんでした。しかし活動をやっているうちに、どんどん子どもたちの数も増えてきました。学校の友達を呼んで来てくれたりとか、たまたま公園にいた保護者の人が自分の子ども連れて来てくれたりしました。今は冬なので10人とか多くて20人とかですが、夏は20人30人40人というかなりの大人数で遊んでいました。

僕たちは平日に公園で遊んでいますが、それ以外にも、自分の大学である子ども向けのお祭りや、慶応大学でやった子ども向けのワークショップコレクションなどに呼ばれました。あと、僕の地元の原村の役場の人に「せっかく村に森があるからそこで子どもたちと地元のおじいちゃんおばあちゃんと遊ぶ活動をやったらどうですか」という話を持ちかけてみて、実現して一緒に遊びました。びんづる祭りという長野にみんなで踊りを踊るお祭りがあります。そこでリヤカーを探してくれた人たちや、公園で仲良くなった大人など、大人が10人くらいで一個の連を作って遊びました。このこれは僕としては、子どものつながりと別に大人のつながりの中でできたことで、嬉しかったです。

テレビや新聞にも紹介して頂いて、それによって最初僕と土肥君と仲間が2人だったのが、それを見てくれた学生が連絡してくれて一緒にやっています。今はスタッフ6人でやっています。

■活動のキーワード「放課後」

僕らが「わにわに」をやっている中でキーワードとしているものがいくつかあります。2人とも子どもが好きで一緒に遊びたいという思いからスタートしたわけですが、どこで子どもたちと関わっていくかというところで、放課後という時間を僕らはすごく大切にしています。平日にある時間です。放課後という時間が、子どもたちにとって日常生活の中の時間であることを僕たちは大切にしています。

当初僕も土肥君もワークショップや子どもキャンプという場で活動していて、1日や1泊2日、2泊3日という時間を子どもたちと楽しんでいました。子どもたちをハッピーにして、そこで子どもたちの笑顔を見ると僕らも幸せになるし、楽しい活動だからこれをやっていきたいなと思っていました。

僕は海外に出る前に1年間小学校で学生ボランティアをしていました。大学を休学して1年間毎日学校に通って学校の教育現場を見てみたいなと思っていました。そこにたまたま僕がやっていた子どもキャンプに参加してくれた6年生の女の子がいました。その6年生の女の子はキャンプではすごい楽しんでいたし、グループの低学年の子どもたちの面倒を見てかなりリーダー的な存在で、「すごくいい子だな」「その子のおかげで楽しめた」と思ってキャンプを終えました。しかし、学校で出会って見たら、その子はむしろおとなしめの存在で、クラスではいじめられているというほどではないのですが、そのような扱いを受けていて、あんまり楽しそうではありませんでした。学校で会ってもあまり話をしてくれませんでした。

これを見たとき、キャンプやワークショップで1日2日楽しませるといこともすごく大切ですが、子どもたちが本当に毎日ハッピーに暮らすためには、その短期間だけでは限界があると感じ、日常生活に関わることがしたいというように思いました。

僕たちはまだ学生ですので、学校生活に直接切り込んでいくのは難しいのでそれ以外の可能性ということで、毎日ある放課後という時間をターゲットにして活動しています。

そのため継続することの重要性を感じています。僕たちはまだ週3・4回しか行けていません。平日は全部で5

日間あるので、できれば5日間毎日いつ行っても公園には「わにわに」の人がいるという状況を作りたいと思っています。

■活動のキーワード「公園」

次に、場所です。子どもたちにも公園や校庭や習い事などいろいろな居場所があるはずですが、僕たちは公園に注目しました。公園はそもそもいろいろな人が集う場所、子どもだけではなく大人も集まる場所です。しかし、最近は公園に人が少ないのです。一番は親が公園に行かせたがらないことです。事件や事故が公園で起こるということもあります。そのため、なかなか公園に行かせてもらえなかったり、そしてそもそも公園に魅力がないのかもしれませんが。子どもたち自身が公園に行って遊ぼうというようになるかどうかということです。せっかく公園はいろいろな人と出会える場所なのに、そこが活用されていないというように感じて、チャンスだと思い公園を選びました。

■活動のキーワード「コミュニティの形成」

もう1つ大きなポイントが、「学校とは違うコミュニティ形成の可能性」ということです。僕たちは放課後の時間帯をターゲットにしている、そうした先行事例では、「放課後の居場所作り」という、文科省が推進している活動があります。長野だと基本的には放課後の学校の校庭を開放したり、土日に教室使って何かワークショップをやったりということで、基本的には子どもにとって学校の延長線上のコミュニティ、居場所になっていると、僕は感じました。

僕自身の話ですが、僕は小学生の時にいじめられていました。転校生でしたので、転校先でかなりいじめられていました。学校以外にもサッカークラブなど自分の居場所と思える場所があったので、学校に行っている間は辛いのですが、「別に学校が全部じゃないからいいや」と思い、あまり傷つかずには済みました。学校が終わった後の居場所が、結局学校のコミュニティの延長上の場所ではなかったら、学校を辛いなと思っている子にとっては、居場所がなくなってしまうのではないかと思います。居場所が家庭だけになってしまい、引きこもりになってしまうのは残念に思いました。僕は、放課後の居場所を学校以外の場所にしたい、子どもの居場所の選択が増やしたいと思い、公園という場所を選びました。

■活動のキーワード「遊び」

最後は「遊び」です。「遊び」といってもいろいろな遊びがあると思います。僕らが「わにわに」で公園でやっているのは、ワークショップみたいに何かを伝える遊びではなくて、子どもたちに「何したい？」と聞いて、その子がやりたいことを引き出す遊びをやりたいと考えています。ワークショップの活動は、多分子どもたちに「こんな遊びがあるんだよ」と、子どもたちに対してインプットになる活動だと思います。子どもたちの遊びの幅を広げます。短期間にそういう活動を単発的に繰り返していくことで子どもたちの遊びの知識としては広がると思いますが、それをどこでアウトプット、実践するのか、実践して失敗したとき誰がサポートしてくれるのかなどを考えた時に、なかなかそういう場所はなく、僕たちは公園でそういう場所を作りたいと思っています。

子どもたちが外で遊びを知識として知ってきたものをサポートします。ワークショップに参加しないと子どもは遊べないかという、そうではなく、子どもたち自身ができることからスタートして、たくさん子どもたちがいる中で遊びの幅が広がっていきます。僕は自分から働きかけるのではなく、子どもたちが何がしたいかというのを上手く聞き出して、それを実現させてあげる役です。願わくばちょっと無理かなということをやらせてあげたいです。子どもたちが「これはちょっと厳しいな」とか思っている、やりたいという気持ちを引き出して、それが成功した時に「やったあ」という気持ちを味あわせてあげたいと思います。達成感・満足感は遊びの中にもたくさんあるのです。